

港湾都市伏見における水辺の歴史性と都市デザイン

Water-front Design based on the Context in Fushimi City, Kyoto

田中尚人*¹・川崎雅史*²

By Naoto TANAKA and Masashi KAWASAKI

1. はじめに

(1) 研究の手法と目的

現在、京都伏見の水辺では伝統的街並みの整備や観光船の復活など様々な都市デザイン、まちづくりが実施されているが、それらは都市のどのようなコンテキストを読み解いて実践され、また継承されてきたものであろうか。港湾都市伏見では、近世以来の舟運を基盤とした伝統的な水辺デザインに加えて、近代期に治水整備も展開され、現代に続く景観の基礎が造られたと考えられる。

本研究では、近世以来京都・大阪間の交通輸送ターミナル、港湾都市として発達してきた伏見を対象に、インフラストラクチャーとしての水辺の機能と都市デザインの関係性について、歴史的資料、文献等を調査・分析し、対象地域にてデザイン・サーベイを行った。本研究の目的は、都市形成におけるインフラストラクチャーの役割を明らかにしてコンテキストの所在を把握し、都市デザインにおけるコンテキストの表現を検証、今後の都市デザイン、都市環境計画に役立てることである。

(2) 既往研究と本研究の位置づけ

伏見に関する近代以前の歴史的記述に関しては基礎文献¹⁾⁻⁸⁾を整理した。伏見に関する既往研究としては、河川港湾伏見港の生成と衰退に関する研究⁹⁾、歴史的市街地の変容と現状を取り扱った研究¹⁰⁾¹¹⁾等がある。また、筆者ら¹²⁾も以前に伏見の近代化について研究を行った。

本研究では、水辺を陸域(都市)と水域(運河)の境界に位置する幅を持った緩衝域であると定義し、時代の要求により近代化したインフラストラクチャーとして取り扱った。この水辺が、社会的な要請としての治水と利水の狭間で、近代から現代にかけて如何に形成されてきたのかを現代の都市デザインを参照しながら検証し、歴史性というコンテキストを表現する手法を考察した試みが、本研究の位置づけである。

2. 港湾都市伏見の都市構造

近世以来、京都の重要な玄関口伏見城の城下町として、その廃城後は、京都～大阪間の舟運を機軸とした港湾都市として発達してきた都市伏見の都市構造は、大凡近代期までに形成されたと言え、その姿は図-1に示されるようなものであった。

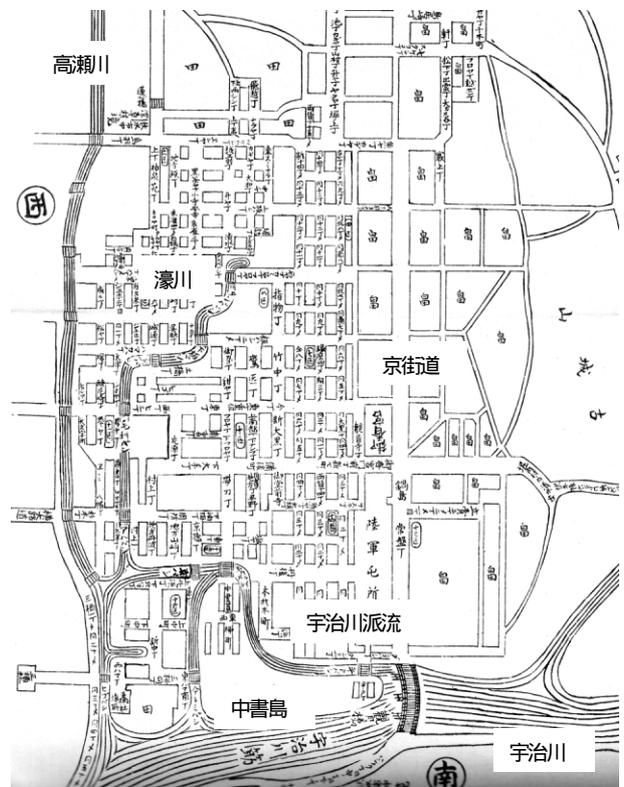


図-1 港湾都市伏見の都市構造

(明治五年九月の絵図を加工：『京都府伏見町誌』より)

3. 近代から現代への水辺の変容

城下町、街道、舟運、港湾、鉄道と次々にインフラストラクチャー整備が行われた伏見における20世紀前半(1900-1950)の史実を整理したのが、表-1である。

以下、近代から現代にかけての伏見の水辺の変容を、(1)舟運、(2)鉄道、(3)治水、との関連において分析し、伏見の都市開発において水辺が果たしてきた役割、水辺に纏わるコンテキストの所在を明らかにした。

Key Words : 景観, 親水計画, 空間整備・設計, 都市デザイン

1 正会員 博士(工) 岐阜大学工学部社会基盤工学科 講師
naotot@cc.gifu-u.ac.jp

2 正会員 博士(工) 京都大学大学院工学研究科 助教授
kawa@ningen1.gee.kyoto-u.ac.jp

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 Tel : 058-293-2447 Fax : 058-230-1248

表-1 20世紀前半の伏見の水辺に関する年表

西暦	和暦	事項
1884	明治27	琵琶湖疏水鴨川運河、伏見濠川に接続／七条停車場から伏見油掛まで京都電気軌道が開通
1895	明治28	第四回内国勸業博覧会、平安遷都千百年記念祭開催
1898	明治31	歩兵38連隊、第19旅団司令部、京都連隊区司令部設
1908	明治41	第16師団が深草に置かれる、師団街道敷設
1910	明治43	京阪電気鉄道敷設（天満橋～京都五条）、川蒸気船
1911	明治44	大倉酒造「月桂冠」全国清酒品評会最優秀賞受賞
1912	明治45	桃山御陵つくられる、京阪宇治線計画
1917	大正6	10月淀・木津両川で大出水、伏見・納所に大被害
1919	大正8	淀川改修増補工事着工（改修延長約46km）竣工は
1920	大正9	高瀬川舟運廃止
1922	大正11	淀川改修増補工事伏見方面着工（伏見地区浸水防止工事、伏見港が堤内に引き込まれる）
1925	大正14	京伏運河計画策定
1917	大正2	京阪電鉄（中書島～宇治）開通
1928	昭和3	奈良電気鉄道（現近鉄）軌道計画にて地下水調査、計画変更の後敷設／伏見火力発電所が三栖に設置／公有水面埋立工事着工（工費は総額232,295円、総面積約1.8km ² ）竣工は1930年
1929	昭和4	伏見市誕生／昭和天皇御大典記念事業／伏見開門完
1931	昭和6	京都市と合併、伏見区へ／疏水放水路完成
1934	昭和9	室戸台風による被害
1935	昭和10	京都にて鴨川大洪水
1943	昭和18	伏見港完成

(1) 舟運と水辺

近代までに、高瀬川舟運、琵琶湖疏水舟運（鴨川運河）が整備された伏見であったが、1918年（大正7）の都市計画準用を受け、京都市は伏見市（1931年に合併し、伏見区となる）を含む地域を工業地帯化する計画を立て、その大動脈として京伏運河を構想した。¹³⁾

1941年（昭和16）には内務省により大規模な伏見港修築計画も立案されたが、第二次世界大戦の激化により実現には至らなかった。1929年（昭和4）淀川改修増補工事の一環として建設された三栖開門（図-2）は、宇治川と濠川の水位差4.5m間の船舶の航行を可能としたもので、年間2万隻以上の航行数を誇った。

戦後も伏見港は河川港として機能し続け、活発な舟運事業が展開され工場や発電の基盤となったが、1962年（昭和37）を最後に淀川舟運は姿を消し、宇治川上流に天瀬ダムが完成した後（1964年）は、宇治川の水位が大幅に低下し三栖開門は稼働することはなかった。

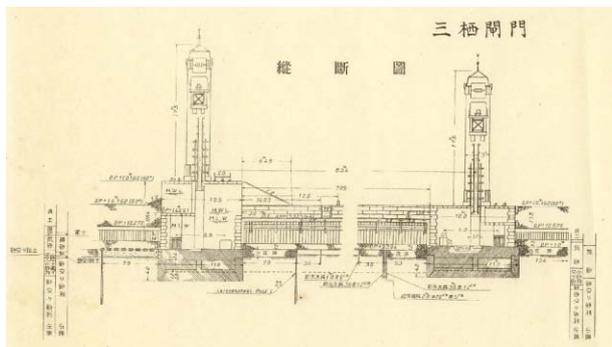


図-2 三栖開門立面図及び平面図（淀川資料館蔵）

(2) 鉄道と水辺

20世紀前半、関西では多くの私鉄が敷設されたが、鉄道は舟運との競争に勝ち、京阪間の交通インフラストラクチャーの軸軸となり、第二次世界大戦後もその地位を占めた。鉄道駅が数多く設けられた伏見市街地（図-3）では、必然的に徒歩中心の街並みが形成され、戦後もモータリゼーションの展開が鈍かったことが推察される。

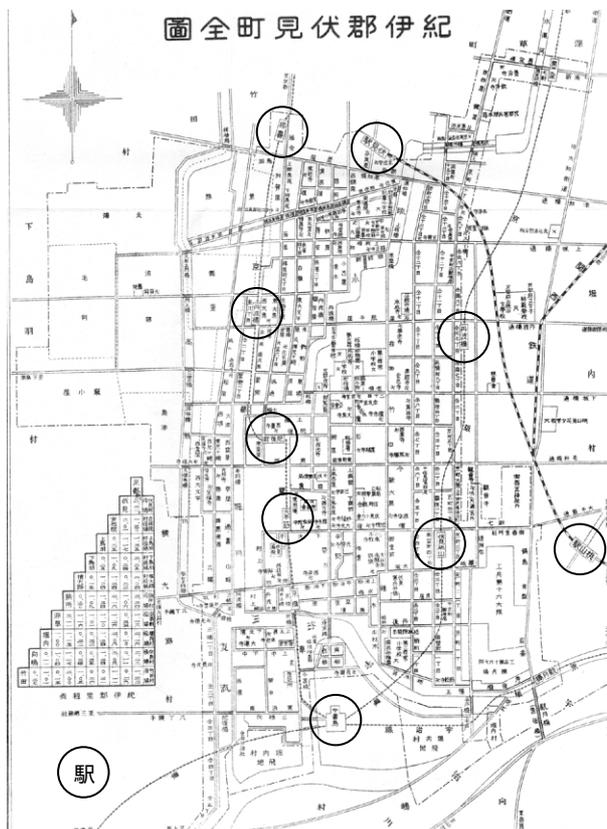


図-3 1928年（昭和3）の伏見（『京都府伏見町誌』より）

(3) 治水と水辺

伏見市街地中心部は、近世以来大凡の水害を免れてきたが、『京伏合併記念誌¹⁴⁾』には「流水頓二減退シ常二土砂堆積シテ雑草繁茂シ殆ト汚物捨場ノ感アリ」、
「幅員統一ヲ欠キ流水ノ深淺ニ差異著シク且護岸モ亦崩壊シテ危険ニ瀕シ不體裁極リナキ」とあり、景観は大きく荒廃したようである。そこで、昭和初期の御大典記念事業の軸軸として「河川整理ニ依ル埋立工事ヲ行ヒ以テ流水適度ノ保留並町體面ノ維持ヲ期シ」とし、水辺の再整備、それに伴う宅地の造成、護岸工（写真-1）の改築により都市伏見の景観を一新しようとした。

この公共水面埋立工事は、1928年（昭和3）より実施され「市の体裁を維持し舟運に便せん」とした。その結果、1930年（昭和5）5月1日に竣工式が挙行され、宇治川派流は「面目を一新した」とある。『京伏合併記念誌史¹⁵⁾』には、それぞれの埋立地区について、道路や駅へのアクセス面、眺望の確保などの評価がなされている。

4. 現代における伏見の水辺デザイン

高度経済成長期に日本の水辺が荒廃したことは数々の先達が明らかにしている通りであるが、伏見では戦前戦後を通じて河川港としての発展を期待されていた伏見港の埋立計画が1963年(昭和38)決定され、1968年には完成。この直後、昭和50年代から河道整備事業、60年代には遊歩道整備事業が計画され、実践されてきた。

このように伏見の水辺は時代の価値観により、ある時は大交通インフラストラクチャーとして活用され、またある時は環境の悪化を指摘され、佳良な住宅地として埋め立てを期待された。近年になっても、水辺の生態系の保全か人々の利活用優先か、という議論も都市の水辺においてはよく耳にする問題であり、都市デザインにおける水辺の役割は混迷を深めている。

本章では、1970年代から約30年間に伏見の水辺、特に中書島を取り囲む宇治川派流一体で展開された水辺整備の概要を整理し、その景観写真を収集した。

(1) 伏見港公園整備(写真-2)

1968年(昭和43)伏見港舟溜まり埋め立て工事完成。伏見港公園設置、テニスコート等が整備された。2年後の1970年には京都外環状道路(観月橋~府道京都守口線)が完成し、伏見港公園を跨ぐことになった。1982年(昭和57)伏見港公園に体育館、プールが完成。

(2) 宇治川派流の景観整備

1975年(昭和50)宇治川派流河道整備。1985年(昭和60)より鴨川等特別整備事業(遊歩道の設置)に着手。

(a) 平戸閘門~蓬莱橋以東(断面図は図-4の)

右岸側は、京都市により1997年(平成9)「伏見歴史的界わい景観整備地区」に指定された南浜町、南材木町等の歴史的街並みの背面に当たり(写真-3)、かつては浜として伏見河岸の主要な荷揚場(写真-4)であった。

左岸は、昭和天皇御大典記念埋立事業の一環として築造された擁壁が並び、沿川は道路となっている。

(b) 蓬莱橋~京橋:伏見みなと公園付近

かつて京橋水路が存在した場所は、伏見みなと公園として整備されている。寺田屋の南面、かつて伏見一の船着き場として知られた公園北側は、近年復活した十五石船の船着き場ともなっている。

(c) 京橋以西~濠川合流部

両岸の堤防上にある建築物が全て、水辺側に背を向けた状態で立地している。

(d) 濠川・宇治川派流合流点:伏見であい橋

宇治川派流に濠川が合流する三叉路部分であり、水辺の広がりを感じさせる場所であるが、1994年(平成6)に伏見であい橋が架橋(写真-5)され、左右岸の行き来はできるようになったものの、水辺の開放性は失われた。

(e) 濠川合流点以南(断面図は図-4の)

両岸に高木の並木と遊歩道が比較的長い区間整備され、クリークのような景観(写真-6)を呈する。

(3) 三栖閘門周辺整備

2003年(平成15)に完成した三栖閘門周辺整備事業。1929年(昭和4)に建設され近代化遺産としても評価の高い三栖閘門の改修・保全事業(写真-7,8,9)に合わせ、管理棟の移設や、施設の公開展示なども行っている。



写真-1 御大典記念護岸



写真-2 伏見港公園



写真-3 宇治川派流大倉記念館周辺



写真-4 伏見大倉浜(大倉酒造付近)



写真-5 伏見であい橋周辺



写真-6 濠川合流点以南



写真-7 改修された三栖閘門



左) 写真-8 三栖閘門周辺の案内版

右) 写真-9 かつて閘門に使われた古材を利用した舗装

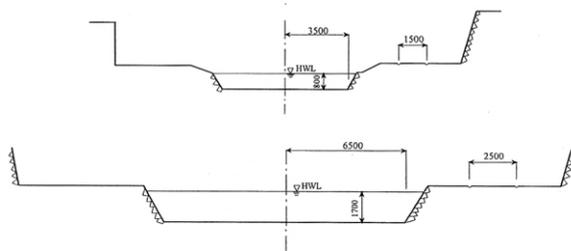


図-4 宇治川派流の断面図

(「伏見港・宇治川派流環境整備計画調査報告書¹⁶⁾」より)

5. 水辺整備のテーマと都市デザイン

伏見において行われた都市整備には、様々なテーマが存在したと考えられるが、その中心となったのは歴史性、つまり港湾都市として水辺と共存してきたという都市伏見のコンテキストであったと言える。

街路系では、宿場や酒屋、酒蔵などの歴史的建造物を核として歴史性を反映させた街並みが形成され、あちこちに史跡や記念碑、建築物の解説などが見受けられる。当然、水辺に関する史跡も多く、先に述べた御大典記念埋立工事記念碑や、かつて水辺の名残を示す案内板なども設置されている。

しかし、これら水辺に関するデザインがインフラストラクチャー・デザインとして十分にコンテキストを活かしたデザインとなっているのか、という疑問が残る。水辺は、建築物や史跡のように単体で人々の生活と関係を持ちコンテキストを形成するのではなく、自然の所作として地形があり水面が形成され、その水辺を活用する人々の社会システム、文化等が付随し洗練されて初めて、都市のコンテキストを成し、景観として立ち現れるから

である。本章では、前章で述べた水辺整備の手法を歴史性の表現の面から分析し、以下のようにまとめた。

(a) 具象化：歴史性をモチーフとして具象化した、例えば和風の照明や橋梁の高欄など、施設のディテールに見られる。

(b) 復活・復刻：かつての施設やシステムを復活・復刻したような事例。例えば十五石舟や、柳の植樹など。失われてしまった水辺へのアクセスの復活や水辺に関わる風習や祭りの再開なども該当する。

(c) 記憶の繫留：かつての水辺の姿を思い起こさせたり、掲示したりして都市デザインを行う手法。記念碑や案内施設などが設置されている場合もあるが、必ずしも形を伴わず、場合によっては環境教育や学習の中でも行われているかもしれない。

6. おわりに

本研究では港湾都市伏見をケース・スタディとして、水辺というインフラストラクチャーに纏わるコンテキストの解釈と、その表現手法の分析を行った。さらに今後、デザイン手法の分析を行っていく必要がある。

参加型まちづくり・プロセス重視の都市デザインの流れのなかで、都市そのものの成立基盤とも言える水辺のデザインは如何にあるべきか。本研究で得られた知見としては、都市形成プロセスの追体験として、都市の歴史性、コンテキストの解釈に重きを置くことが重要であることが分かった。

参考・引用文献：

- 1) 京都府紀伊郡伏見町役場：伏見民政誌，1926.4
- 2) 伏見町役場編：京伏合併記念伏見市誌，1929.1
- 3) 京都府紀伊郡役所編・伏見町役場編：京都府紀伊郡誌・京都府伏見町誌，臨川書店，1972.12
- 4) 新撰京都叢書刊行会：新撰京都叢書第五巻，伏見大概記・伏見鏡・伏見叢書，臨川書店，1986.9
- 5) 京都市編：史料京都の歴史16 伏見区，平凡社，1991.1
- 6) 京都市役所編：京都市水害誌，1936.3
- 7) 淀川百年史編集委員会編：淀川百年史，建設省近畿地方建設局，1974.
- 8) 田邊湖郎：琵琶湖疏水誌，丸善，1920.10
- 9) 笹松明男，金井萬造，長尾義三：日本最大の河川港湾伏見港の生成と衰退，第8回日本土木史研究発表会論文集 p.230-236，1988.6
- 10) 西川幸治ら：歴史的市街地の変容と現状 伏見における事例的研究 その15，日本建築学会学術講演梗概集（東海），p.377-386，1985.10
- 11) 青山能也，片方信也，山本善積ら：近代都市計画の動向 伏見を例にして，日本建築学会学術講演梗概集（九州）p.1583-1584，1981.9
- 12) 田中尚人・川崎雅史：京都伏見における水辺の近代化に関する研究，土木計画学・論文集，Vol.19 No.2，pp.331-338，2002.9
- 13) 都市計画京都府地方委員会：京阪間ノ運河計画二就テ，1925.1
- 14) 京伏合併記念会編：京伏合併記念伏見市誌，pp.179-180，1935
- 15) 前掲文献14)，pp.185-186
- 16) 京都府：伏見港・宇治川派流環境整備計画調査報告書，1988.3